

双葉の桜よ 90歳の詞

東京電力福島第一原発事故で加須市に避難した伊沢恭子さん(90)が福島県双葉町への望郷の思いを込めた詞「双葉の桜」に曲がつけられ、19日の野外コンサートで披露された。ふる里が帰還困難区域となった事故から4年半。名物の桜との再会に希望を見つけ、ペンを執った。90歳の「挑戦」だ。

原発事故で避難 伊沢さん

10年前に夫を亡くした伊沢さんは、栃木県に避難した子らとも離れ、加須市内の老人ホームで暮らす。趣味で撮りためた写真の中に、双葉町の前田川の土手や小学校の坂道などに咲く桜を見つけた。「せつかく咲いても、今は誰にも見てもら



野外のコンサートで自作の詞を口ずさむ伊沢恭子さん(中央)と補作の今村寛さん(右) 〓加須市

帰郷いつか「花の下で会おう」

えない」。そんな桜の気持ちになって、再び人が集まる日を思い浮かべた。

作詞に挑むのは初めて。東日本大震災の被災者支援を続ける元高校教師今村寛さん(56) 〓久喜市 〓が補作した。「春が来るから……」前田川 堤防の桜が「つぶやいた」と詞は始まる。「やがて集い 花の下で会おう 遠く離れても 心に咲く花は 双葉の桜」

支援者をたどって、新潟県十日町市で作詞・作曲活動をする池田靖啓さん(64)に作曲を依頼。ふる里の復興を願う歌詞は、「誰もが歌いやすいメロディー」(池田さん)という3分半の愛唱歌になった。

披露の場となった19日の「よりそいコンサート」は、震災被災者を支援するNPO法人・加須ふれあいセンター前の広場で開かれ、市内の音楽家らが演奏した。集まった約100人に伊沢さんは作詞者として紹介され、歌い手の声に合わせて自らの詞を口ずさんだ。

「感無量。幸せです。多くの人に歌ってもらえれば」と伊沢さん。双葉町に帰る日を思い、「何事にも挑戦です」。2曲目の詞の構想をあたためているという。(高橋町彰)